

2017年12月

現代の家庭教育の在り方 ～戦前の家庭教育と比較して～

経営学部 経営学科 新井ゼミ
B4R11051 川内田悠輔

【卒業論文概要】

近年、子どものいじめを代表とするような問題行動が増加・陰湿化する傾向にある。こうした問題の他にも、現在の日本の若者・子どもたちには、他者への思いやりの心や迷惑をかけないという気持ち、生命尊重・人権尊重の心、正義感の低下や、基本的な生活習慣の乱れ、自制心や規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下などの傾向もみられる。その為、学校などの教育機関のみではなく、家庭教育の在り方を考え直すことが必要である。

本論文の目的は、先行研究を基に現在の家庭教育と戦前の家庭教育を比較し、違いを明らかにするとともに、これからの家庭教育の在り方について考察し、見出すことにある。

まず、先行研究を基に戦前の社会状況と現代の社会状況を示した。戦前の過程とは変化し、核家族化が進んでいることや情報化社会になったことなどが明らかになった。また、戦前の家庭教育の長所短所及び、現代の家庭教育の長所短所を比較し、それぞれの問題点や、子どもにはどのような変化が生じたのかを明らかにした。一つ事例を挙げれば、戦前の家庭教育では、高い倫理観や規範意識の醸成がなされていた一方で、体罰や恐怖感でしたがおそれる側面も強くあった為、自主性があまり育まれなかったようである。それに対し、現代の家庭教育においては、教育を家庭で行う概念が戦前と比較すると減少し、教育を行う場が家庭ではなく、習い事や塾等の外へと移っていることである。

学校教育において2000年代に入り、体罰に代わる即効性のある指導法が求められるなかで、体罰以外のパワハラ的指導法がふたたび活性化しているのが現状である。脅しなどのパワハラ的指導法をドイツの精神科医アリス・ミラーらは「ダークペダゴジー（闇の教授法）」と呼んでいる。これは学校教育のみではなく家庭教育でも行われており、これを受けた子どもの屈辱や悲しみはそのままなくなることはない。大人になってからも、それは一向に減少することなく継続し、何らかの機会にそれが他者に対する暴力として発揮され、自分が受けた教育をまた子どもに行っていく。この連鎖が問題行動の源泉であるとされているため、この「ダークペダゴジー（闇の教授法）」にも着目し、考察した。

本論文において、今後は、厳しい社会を生き抜くために、現代と戦前の教育を掛け合わせ、従来の考え方とは異なる現代社会にあった教育を家庭でより意識することを課題として提示した。